

アジア都市の水辺における緑地の保全と再生—タイ王国チュラロンコン大学との国際ワークショップ報告—  
Developing landscape conservation and design strategies for waterfront spaces of Asian cities: Report from international  
workshop with Chulalongkorn University, Thailand

土屋一彬\* 原祐二\* 宮川智子\* / Kazuaki Tsuchiya\*, Yuji Hara\*, Tomoko Miyagawa\*

\*和歌山大学システム工学部 / Department of Systems Engineering, Wakayama University

## 1. はじめに

モンスーン気候に育まれたアジア都市は、豊かな水辺環境をその特徴とする。これらのアジア都市の多くは河川下流のデルタ地帯に位置しており、平坦な低地域に広がっている。わが国の都市を例にとれば、大阪市は淀川の、京都市は鴨川や桂川の、そして和歌山市は紀ノ川の周辺の低地域に展開している。こうしたアジア都市では、雨季に河川が氾濫を繰り返し、たびたび周囲の市街地に被害を与えてきた。例えば 2011 年には、タイ王国においてチャオプラヤ川下流域に位置するバンコク周辺にて大規模な洪水が発生し、住宅や農地などに大きな被害を与えた。モンスーン・アジアにおいては、こうした洪水の被害を緩和し、水運や農地の灌漑に利用するために、長大な水路ネットワークが古くから構築されてきた。こうした河川や水路からなる水辺空間は、今日のアジア都市のいたるところでみられ（図 1）、洪水の緩和だけでなく、景観の向上、地域住民のレクリエーション利用、生態系保全などの観点から、その公益的価値が広く認識されている。しかし、今日では周辺の都市化の影響により、水量の減少、水質の悪化、生物生息地としての機能の低下などの問題が顕在化している。いくつかの国や自治体はその対策に取り組み始めているものの、その成果はいまだ十分とはいえない（土屋・武内 2008）。



図 1 バンコク・チャオプラヤ川沿いの緑地

こうした問題意識に基づいて、筆者らは、研究事業「アジア沖積平野立地型都市郊外における循環型社会を基調とした都市農村融合と戦略的土地利用計画」（日本学術振興会最先端次世代プログラム）に共同でとりくむタイ王国・チュラロンコン大学建築学部造園学科の Danai Thaitakoo 博士らとともに、アジア都市の水辺における緑地の保全と再生に関する国際ワークショップ（以下、本ワークショップ）を実施した。本稿では、その内容と成果について、特に日タイ両国の学生・研究者間の国際交流への貢献という観点から報告する。なお、上記の研究プロジェクトでは、アジア 4 都市（フィリピン共和国・メトロマニラ、タイ王国・バンコク、中華人民共和国・天津市、和歌山および阪南地域）を対象に、アジアの風土に根ざした都市農村混在型の空間計画論(Hara et al. 2010)を提示すことを目的としており、バンコクにおいては、今回ワークショップを共催した Danai Thaitakoo 博士らとともに現地調査を展開している。本ワークショップの際には、こうした共同調査の経験をもとにして、日タイの研究者の間で、実際の日本の都市計画事例を参照しながら、今後の研究展開も議論された。

## 2. ワークショップの内容と成果

本ワークショップの内容とその狙いは以下の通りである。本ワークショップには、チュラロンコン大学から教員・大学院生の 9 名と、和歌山大学システム工学部環境システム学科から教員・学生 9 名の合計 18 名が参加した。2012 年 10 月 8 日から 15 日にかけて、京都市および大阪市の水辺空間を対象地として実施され、期間中は、和歌山大学教員からの対象地の都市計画などに関する現地講義と、3つのグループに分かれてのグループワークが中心となるプログラムであった。グループワークの課題は “How can we enhance the use of waterfront spaces?” であ

り、各グループそれぞれは期間中にこの課題に対する提案をまとめて発表することが課された。各グループは、ワークショップ期間中の多くの時間をフィールドワークにあて、実際に人々は水辺空間をどのように利用しているか、どういった生物の生息が確認されるかなどの情報を、現地で収集していた(図2)。なお、講義やグループワーク、発表は全て英語で行われ、特に国内の学生には、水辺空間整備にまつわる歴史などの日本語の情報をタイ側に伝達し、議論を先導していく役割が期待された。逆にタイの学生には、水辺空間整備に関する日タイ間での差異と共通性の理解を通して、日本の水辺空間整備に新たな視点をもたらす役割が期待された。



図2 京都市・鴨川沿いの緑地

グループワークの成果をまとめた各グループの発表内容は、それぞれが異なった独自のものとなった(図3)。1つめのグループは、水路が形成する身近な水辺空間の人々の憩いの場としての役割に着目し、特に住宅地が多い地区において、現在は垂直の護岸をより人が水際に降りやすい階段式の護岸に変更する案を発表した。2つめのグループは、水辺にみられる生態学的、社会的、文化的、経済的な機能を包括的に分析した上で、特に十分でないと考えられた生物生息地としての機能をもたせるような整備の必要性を主張した。3つめのグループは、2つめのグループと同様、水辺の生物生息地としての役割に着目し、その改善手段として、大規模緑地を核とし、生態学的に修復された水路でそれらを連結するエコロジカルネットワークの案を提示した。これらの発表とそれを受けた教員も交えた議論を通して、水辺空間が秘めている多様な価値をより明確にし、日タイの参加者の間で共有することができた。また、日タイ双方の学生から、異なる文化的背景を持つ者同志で、英語を通して議論し、成果をまとめたことは、貴重な経験となったとの声が聞かれた。主催者であるチュラロンコン大学や和歌山大学の教員側としても、これらのワークショップを通じて、アジア都市の水辺空間整備に関する理解を深め、新しい洞察を得る機会となった。



図3 グループワーク成果発表の様子

### 3. おわりに

本稿では、チュラロンコン大学と和歌山大学との共同でおこなわれた国際ワークショップの内容と成果について報告した。本ワークショップの成果は、日本やタイなどで展開されている上記プロジェクトのもとでの調査結果とくみあわせることにより、アジアの風土に根ざした緑地の設計・計画論へと展開していくことが期待される。今後、プロジェクト研究においては、他のプロジェクト対象地であるマニラや天津市も含め、土地や水の問題を巡る構図を土地利用などの共通指標を用いて比較検証し、より議論の一般性を高めていきたいと考えている。

### 引用文献

- Hara, Y., Hiramatsu, A., Honda, R., Sekiyama, M. and Matsuda, H. (2010): Mixed land-use planning on the periphery of large Asian Cities: The case of Nonthaburi Province, Thailand. *Sustainability Science* 5, 237-248.
- 土屋一彬・武内和彦(2009): 金沢都市農村圏における水路網保全施策展開後の管理体制の課題. *農村計画学会誌* 27, 245-250.